文化庁　工芸技術記録映画

竹工芸

―飯塚小玕齋のわざ―

〈製作意図〉

竹工芸は、素材の種類にめぐまれかつ優れた特質をいかして、我が国特有の伝統工芸として発達してきた。種類として編組物・丸竹物・丸竹組物等に大別され、その技法は実に多様である。近代に至って、独創的で多様な技術とともに高い芸術性をめざす制作が意図され、優れた竹工芸作家が輩出した。

この映画は、重要無形文化財に指定されている飯塚小玕齋氏の「竹工芸」技法を映像で記録して、重要無形文化財の保存、後継者の養成、技術者・学識者の研究及び無形文化財の公開・普及に役立てようとするものである。

竹は自然の姿が
最も美しいと思う。
竹を割り　削り　造形する。
そして竹の美を造形の世界で
表現しようとする。
苦悩の連続ですが
その苦しみが又楽しみでもあります。

飯塚小玕齋

飯塚小玕齋　略年譜

大正8	5月6日東京・本郷に、竹工芸家琅玕齋の次男として生まれる
昭和17	東京美術学校油絵科卒業
22	飯塚琅玕齋に師事して竹工芸を修業
	第3回日展に初入選(以後連続して出品)、28年北斗賞、29年特選、35年菊華賞を受賞する
28	独立自営して竹工芸の制作に専念する
49	迎賓館開館に際し日本館大広間の花蘆制作
	第21回日本伝統工芸展初出品、文部大臣賞受賞
50	(社)日本工芸会正会員
	第22回日本伝統工芸展朝日新聞社賞受賞

〈内　容〉

飯塚小玗齋は、竹工芸界の重鎮であった父琅玗齋の指導のもとで広範囲の伝統的技法を修得し、さらに独自に研究・研鑽を重ね、特に竹刺編や束ね編、各種網代編等の高度な技法を駆使して、伝統と現代を融合した風格ある作風を確立した。

この映画は、飯塚小玗齋氏が新たな構想のもとに取り組んだ「松葉編白錆花藍　白龍」の竹伐りから素材づくり、編組等の制作工程を綿密に追いながら、主要技術に併せて氏の工芸観・芸術観をもとらえる。制作に要する全時間の約3分の1に及ぶ入念な素材づくりや、精緻な松葉編と豪快な束ね編を併用した編組工程は、竹という素材の特質を存分に生かした作業である。当初の構想及び計画に基づいて各工程は進行するが、随所に氏の造形感覚が反映して高雅な制作となる。また、併せて、格において〝真〟の制作の「白龍」と対象的な〝草〟と言うべき、つぶし竹を荒く大胆に、一気に編み上げる制作を試みている。これにより氏の制作の理念とも通ずる、格にいう〝真〟〝行〟〝草〟による用の創作世界を示す。その〝草〟の大作『渦潮』に花が活けられた。生活の中にあって初めて自らの作品は完成すると考える小玗齋はまさに現代を生きる美の表現者である。

51	第23回日本伝統工芸展監査委員（以後監査委員・審査委員を歴任）
54	正倉院宝物の竹工品の調査委員委嘱（58年まで）
57	重要無形文化財「竹工芸」保持者に認定
59	紫綬褒賞受賞
61	㈳日本工芸会理事、木竹工部会長に就任（現在に至る）
62	石川県立輪島漆芸技術研修所主任講師就任
63	太田市制四十周年記念「飯塚小玗齋作品展」開催
平成元	「人間国宝飯塚小玗齋竹芸展」開催（東京・三越本店） 国庫補助による竹工芸伝承者養成事業（2年度まで） 勲4等旭日小綬章受賞

企画　文化庁
製作　㈱プロコムジャパン
製作スタッフ

製作	神崎 晴之
脚本演出	山添 哲
製作進行	葛木 誠
撮影	広内 捷彦
撮影助手	松原 義人
照明	伴野 功
録音	堀内 戦治
音楽	出川 史郎
龍竹演奏	ごろばば
(挿花)清風瓶花副家元	早川 研一
解説	伊藤 惣一
現像	IMAGICA

楽器「龍竹」について

映画の中で神秘的な低音の響きを聞かせてくれるのが、ごろばばの演奏する「龍竹」である。

単なる一本の竹筒であるが、特殊な呼吸法によって発生する倍音によって、音のうねりを作り出す世界で最もシンプルな楽器の一つといえる。